慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	曾我物語傳承論：その一
Sub Title	Critical literature handed down on The Soga Tale
Author	塚崎, 進(Tsukazaki, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1955
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.4, (1955. 2) ,p.41- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00040001-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

曾我物語傳承論

――その一――

塚崎　進

序　論
十郎の性格
古本にない化粧坂の少將
遊女と懺悔物と
幸若舞と流布本
虎御前の廻國
曾我兄弟の墓
「平家物語」と「源平盛衰記」の交渉

序　論

曾我物語の作者はいまだに判つて居ない。加ふるに、この物語の著作年代も推定の論を重ねて久しい。それにも拘らず、曾我物語の諸本の種類は決して少くないばかりか、各諸本相互の相違變化は凡そ極端である。だが、この變化は「義經記」の如く全々別種と思は

れるストーリーの集合體を爲す譯ではない。雪だるまをころがすが如く、A本よりA＋B本へと移行して行くのである。

日本の文學、殊に物語と名のつく作物に對して、我々は細かい注意を忘れてはならぬ。相違せる異本自體、或獨立的正本の意識を充分持つてゐる場合が多いからである。まして、異本の多い、平家物語、曾我物語、義經記に到ると、各異本々々に各々別の作者を考え得る程違つてくる場合がある。まして此異本に時代の差があつて、その時代の趣好を反映したとなると、異本の獨自性は倍加する。

語り物に屬する曾我物語にあつては、作者別、時代思想の推移のみで足らない。加ふるに、この物語を語つた語り手、所謂傳承者の趣好が入つて來たことを考ふ可きである。たま〳〵この傳承者が女性であつたが爲に、曾我物語は、涙多き悲劇性を添へた。之を異本の相違を詳細にしらべつゝ、實證をこころみようとするのである。

附記　曾我物語の異本綜覽を戰時中につくり、之を忘失した。爲に、目下、この再成を計つてゐる。從つて、この傳承論はその二に据ゑるべきものである。その一として異本相違の論があるのである。

十郎の性格

一

眞字本（存採叢書）の各卷々の初頭に、并序本朝報恩合戰謝德闘諍集と書出してある。之は大石寺本（國史叢書）も同じである。大山寺本曾我物語（荒木良雄氏校定）も此兩本に等しく十卷本であるが、この筋と內容は流布本（古典全集）に近似してゐる。亦、此大山寺本、流布本（十二卷）共に各卷々にミダシが附いてゐるのである。

眞字本の筋立ては全卷大石寺本に同じ。從つて筋立ての上のみを考へる今は、大石寺本を以て大山寺本と對立させてみよう。大石寺

本にはミダシがないが、その筋立てで比較して行くと、先づ、大石寺本に有する内容が大山寺本に見當らぬ個處は、兄弟の死後、虎御前が廻國する個處だけである。處が、大山寺本にあつて、大石寺本にない内容は相當にある。判り易く言えば、大山寺本の方が、その内容が豐富なのである。これをミダシで見てゆくと次のミダシの内容だけ、判つきり增加してゐるのである。

「卷一」 助親調伏する事
時政が女、夢うりかいし事
「卷二」 杵臼、程嬰が事
「卷三」 源太、曾我へ兄弟召の御使に行きし事
母、歎きし事
助信兄弟を連れて鎌倉へ行きし事
兄弟を梶原請ひ申さるる事
由井の濱へ引出されし事
人々君へ參りて兄弟を請ひ申さるる事
畠山重忠、請ひ申さるる事
ちやうじが事にて兄弟助かる事
兄弟曾我へ歸り喜びし事
「卷四」 平六兵衞が喧嘩の事
三浦の片貝が事
大磯より虎を具して曾我へ返りし事
「卷五」 五郎と源太とけんくわの事

五郎化粧坂の女に情懸けし事
「卷六」大磯にて盃論の事
「卷八」箱根へ參りし事
別當坊へ行きし事
畠山六郎と梶原と鹿論の事
畠山歌にて訪はれし事
「卷十」同じく鎌倉へ召されて斬られし事

流布本になるとこの大山寺本の增加は勿論、加ふるに次のミダシを增加してゐる。(虎御前廻國することは大石寺本に順應してゐる。)

「卷一」費長房が事
「卷二」泰山府君の事
奈良の勤操僧正の事
「卷四」眉間尺が事
「卷五」和田より雜掌の事
帝釋と阿修羅王戰の事
鴛鴦の劍羽の事
吳越の戰の事
鶯と蛙の歌の事
「卷六」ふん女が事

辨才天の事
比叡山の始まりの事
佛生國の雨の事
「卷七」泣不動の事
「卷八」燕の國旱魃の事
船の始の事
「卷九」波斯匿王の事
「卷十一」鬼の子捕らるる事
貧女が一燈の事
菅丞相の事
「卷十二」虎と少將法然に逢ひ奉りし事

二

以上、大石寺本にない筋立てを、大山寺本流布本のミダシに依つてしらべると、先づ印象深く入つて來るのが、非常に後味が悪いといふ事である。一口で言ふなれば、不道德で、しかも、陰慘ですらあつた。

之は、も一つ細部に入ると、先づ虎御前の描き方にその一端の罪があると言つても否定しきれぬ衣を纏つてゐる。十郎が遊女虎の處へかよつたが故に、後味の悪い曾我物語が出來あがつたと言ふ意味ではない。十郎が虎の處へかよつた事は、古く眞字本、大石寺本にも見えてゐるし、又相模野の小さな丘山彦山で、十郎が仇討に臨んで虎と悲しんだ悲戀の涙は、むしろ流した量も古本の方が多かつた

位のものである。

ミダシの增加を細かく見てみると、流布本系（大山寺本流布本）は「平六兵衞が喧嘩の事」「三浦の片貝が事」「大磯より虎を具して曾我へ返りし事」の三條が加はつてゐる。この事を言ふ前に、幸若舞曲又は歌舞妓芝居で印象深い「和田義盛」と同じく之には切離す事の出來ぬ荒事藝の五郎と朝比奈三郎との力競べ、所謂草摺引の事を言はねばならぬ。流布本は「卷六」の初頭である。この筋は既に著名であるが、要約して言ふと和田義盛が下野へ行く途中大磯の虎と言ふ有名な遊女が居ると聞き及び、酒一つ進めて通らうと寄る。處が、既に十郎が虎の處へかよつて來て居る爲席へ出て來ない。和田は肚の蟲がおさまらぬ。揚句の果てが十郎を呼出す。さて、虎に盃を與へ、俺と十郎とどちらに盃を吳れるかといびる。虎はその場に腦むのである。その前にしても虎は母からこの席に出でよと責めたてられてゐたのであつた。

「何とて出で給はぬぞや。時世に從ふならひ、思はぬ人に馴るゝもかかる身の習なり」之が歌舞妓になると、和田の主は權力もあり、第一金もあり、それに引換え、十郎は貧乏の文無し、と變つて來るのであるが、時世には從ふもの、嫌な人に馴れるのもこの遊女の身としては當然のことと言つてゐるのであるからこの歌舞妓と比べてもテーマは五十步百步である。この盃を虎は煩悶の末十郎に差す。和田の不興は極點に達した。十郎。之は主客の和田殿がとるべきものと、盃を和田に差出すと、義盛

「それはさる事にて候へども、志の横取無骨なり。いかでさるべき」と色町の粋人氣取りの樣な科白を言ふ。やがて十郎が盃を取り上げ三度飲む。以上は遊女に交はる前の婚姻の形式である。義盛が居丈高になつて、

「年ほど寄るまじきものはなし。義盛が齡、今十四五取り除けなば背かれじ。たとひ一旦は嫌はるゝとも、かやの盃餘所へは下さじ」とて、高聲の念佛殊の外に聞えける。とある。わざと不粹の念佛をしたのである。そこで今にも爭ひにならんとする。之を五郎が飛んで來て、荒ぶる大力にその場を壓倒して引擧げる話である。

以上の話だけを切離して讀むとすれば、誰もが之を古い說話とは思えぬのである。傾城女に似た遊女虎の苦腦は、如何にも江戸時代人の好みである。處が、この個處は大石寺本「卷六」には見當らぬのである。從つて、之だけは後々の增加と思つてゐたら、實は大石

寺本の「卷五」に和田殿に會つた話が出てゐたのである。たゞ話はこの樣に長きに亙つてゐないばかりか、驚ろく可きは和田と喧嘩をする處でなく、第一大力の朝比奈が思慮深くして、兄弟の苦心に涙を流して同情してすらゐるのである。「卷五」の終りに近い

斯りし程に建久四年癸巳四月中旬の頃、和田左衞門尉義盛、子息を何れも引具し、伊豆の熱海の湯より、早川湯本の湯に至り、三浦へ歸り給ひし。其日は大磯宿晝休なりけるが、朝比奈三郎義秀、其日の雜掌にて、先達つて大磯へぞ着きにける。和田殿も來り給ひ、義盛宣ひけるは、音に聞ゆる虎を呼びて見ばやとぞありける。朝比奈、折節十郎殿も、是に御入候と申されければ、さらば共に呼出し參らせよとて、二人乍ら呼出し、酒宴ぞありける。義盛つく〴〵と虎を見給ひて、能き遊君にてありける。義盛年も寄らず。十郎だにたのめずば、心も移りぬべきものをとぞ宣ひける。和田殿、いかに身に添ふ影の如くなる五郎殿はと尋ねられける。曾我の留守に候と申されける。其詞も果てざるに五郎門内へつと入り來る。和田殿涙を流しつゝ、哀れ契違はぬ者かな。是へ〳〵とて、酒宴をぞせられける。日も晩に及びければ、和田殿、暇申してよ殿原とて立たれけり。

之を流布本系と比較すると、大石寺本より脚色變化を行つたことが一目で判るのである。和田が有名な虎の處へ寄つてみた。十郎がゐた。又五郎も陰の如くにあらはれた。酒盛となつた。その筋は全く同一である。言つてみれば遊女虎を中心に話は膨張してゐるのである。單に之に止まらない。

三

「平六兵衞が喧嘩の事」と言ふのは、詳しくは三浦平六兵衞のことである。この女房が相模の國土肥の彌太郎の女である。つまり曾我兄弟とは從兄である。此女房が幼い時に伊東に居り十郎と共に育てられ、成人後は十郎が情をかけて交はる。處が、之を親は知らずに平六兵衞に嫁してしまふ。女房は昔の十郎が忘れられず、平六兵衞の留守に戀文を屆ける。之が主人に判つて、偶然兄弟と腰越であつたからたまらぬ。

「まことや御分は義村が在京の間に聞くことあり」と若々しく言ひかけた。すると十郎が、だます如き科白を吐く

「如何樣人の讒言と覺え候、よく〳〵尋ね聞食し候へ、斯樣の次第見參に入り直に承り、所緣のしるしと存ずるなり。たとひ身に過ありとも、一度は御免にや蒙ぶるべき」知らぬと嘘をついて置き乍ら、然かも、若し本當であつたとしても一度位はゆるせと言ふ。よくある僞辯者の科白なのである。處が、ます〳〵嫌になるのは、自分の女房の前世のことが判つて怒るのは當り前だが何にも知らぬ五郎が兄を助けやうと、矢先をつきつけると、三浦「今勝負しては損なり後日をこそ」と思ひ靜めて引あげて仕舞ふ。流布本系の後味の惡いと言ふのはこんな處にあつたのだ。嫌な十郎を語るものである。處が、之に更に輪をかけた樣な話が次の「三浦のかたかひが事」の一條で、之は叔母聟の三浦の別當が、かたかひといふ美しい侍女を召使ひ之に手を染めた。それを女房が憤るので、仕方なく女を十郎に押つける。之を知らぬ十郎が親方の言つけだから受取つたとある。十郎がその日は用があつて家路につくと、家來が「かたかひを曾我へつれて行くと早合點して十郎を追かける。十郎は人の讒言か何かだと釋明して歸るが腹の虫は納まらず、ここにて腹を切つて打違へても飽き足らなく思つた。しかし父の爲に供へ置きたる命、思はざる事に果つべきかと思ふた、後に事は釋然としたが

「然れば嫉妬の深き女は、前後を辨へずして家を失ふ例へは、今に始めずといへども、斯程の大事出でなんとは知らで、言ひ合せけるぞ眞の嫉妬にてぞ有りける」とあり結局此嫉妬した女房を離別したとある。何故此樣なくだらぬ話が挿入されたかは、又深く考へてみねばならぬことである。

四

之に續いて、挿入された內容のミダシは「虎を具して曾我へ行きし事」の條であるが、此處で又虎が活躍する。十郎、虎、互の戀慕は、とてもかよひ合ふ位で滿足出來ず、遂に自分の家に引取ることを描いてゐる。處が、之が大石寺本では判つきりと五郎に禁足されてゐる事柄であつたのだ。引例すると、

されば十郎こそ家にも置ばやと思ひけれ共、弟の五郎、由なき事とて、頻に諫めければ、唯頼めと思ひつる計にて、大磯宿へぞ通ひける。（卷五）

十郎が虎を曾我へ運れかへつたのは、いよい仇討出發の時だけである。遊蕩に身の押へのきかなくなつた、之になると少しくでれた話かと思ふ。

この間に判明した事を要約すると、大石寺本、流布本系の間にあつて、同じ虎でもその遊女振りの違つてゐる事である。流布本系に扱はれた虎の苦惱は遊女の嫁業故、他夫に交渉せねばならぬそれである。然し、大石寺本に全々描いてないと言ふことは、つまりは遊藝の女としての素性を判つきりもつてゐるのであつた。「卷五」の中程に、

此虎と申す遊君は、母は元來平塚の者なり。其父を尋ぬれば、去る平治の亂に誅せられし、惡右衞門督信頼卿の舍兄民部權少輔基成とて、奥州平泉へ流され給ふ人の乳母子に、宮內判官家長といひし人の娘なり。其故は、……

遊君より遊女へ、つまり遊女の歴史より見れば、非常な零落の甚しい姿を流布本系にしめしてゐた。故に、虎御前の活躍は物語に言はばぬれ事の如き妙な印象を刻んでしまつた。更には、之から發して十郎の性格が遊蕩にでれりとして來たのも、言つて見れば流布本系が別の作者の手が加はつたか、或は亦語り手の語り物の新しい脚色になつたものに違ひない。物語が後々人物の性格迄も、二重にし、或は變更されて行く例は、曾我物語に止まらぬ。日本の物語文學のある宿命とすら思つてゐるのである。この物語にあつては男の書いた古本が、女性に語りつがれた爲に起つた宿命かと思つてゐる。

古本にない化粧坂の少將

一

眞字本と大石寺本との間に、分量だけで言ふならば十個處の大きな相違點が見出される。その內の一點に、五郎の科白として、女が

罪多く交はる可きものでないことを言つてゐるのである。それにも拘らず、流布本系になると、五郎は遊女に交る禁を自ら放棄して仕舞つてゐるのである。

歌舞妓を通して曾我兄弟の事件を印象づけられてゐる我々は、五郎の配偶に化粧坂の少將と言ふ遊女は切つても離せぬものと思つてゐるが、實の處、眞字本、大石寺本共に女人無益の五郎であつたが爲に、全々少將のことはない。何故か之が又遊女一くだりの話が流布本系大山寺本の「卷五」に加はつてゐるのである。何も此樣なみぢめな話を加へなくともと今日よりは思ふのであるが、「五郎化粧坂の女に情懸けし事」の條は梶原源太が日頃五郎の馴染めた此化粧坂の遊君をその歌の才能と權力を持つて一人占めにする。五郎は緣切れの果敢ない目に遇つてしまふ。

五郎聞きて、流を立つる遊び者を賴むべきにはあらねども、世になりなば、いかで源太には思ひ代へらるべきと、わが身一人のやうに思ひ「げにや貧は諸道の妨げとは面白かりし詞なり。人を怨むべきにもあらず。身こそつらけれ」

二

祖父祐親の死後、母の再嫁した曾我太郎は足柄下郡曾我庄の貧しい武將であつたのだ。ましてや後妻の子である。貧はつきまとつてゐたであらうし、事實足柄下郡は地味の悪い瘦地である。五郎は歌を置いて去るのである。併し、この兄弟に貧乏の苦を味はしめるのは實は流布本系よりであつた。歌舞妓にゆくと例へば、「念力箭立楣」（文化三年正月中村座上演南北の手が加はつてゐるといふ）を見ると、家來の鬼王道三郎が十郎の放蕩資金を得るのに血をしぼる苦勞をする。立役である曾我兄弟にみぢめな苦勞を演ぜしめる事が不自然に思はれて來て、この二人の家來に苦勞させるに到つたものに違ひない。

西鶴、近松の描く金が物いふ郭の世界、そこ迄行かずとも、遊女の扱ひ方を見ると、既に片足は入れてる姿であつた。室町、織田、豐臣の時代にしてからが此樣な趣好の文藝は受取つてないのである。してみると、五郎に化粧坂の少將を配偶したのは、これより後の

時代人の趣好であつたのだ。十郎に虎御前がゐる。五郎に居ないのは片手落である。傾城萬能の江戸人の要求がこの片手落をゆるす譯がない。流布本系全卷に亙つて江戸期の作と言ふ意味ではない。少くとも十郎にまつわる遊女としての虎、及化粧坂の少將は新しい脚色に生れた遊女であつたのだ。

遊女と懺悔物と

一

曾我兄弟の祖父の死方は吾妻鏡の場合、頼朝より助命の令を下されたにも拘らず、前勘を耻づと稱して武將の最期を飾り自殺して果てるのである。

大石寺本系（眞字本を含む）が同一であることは既に明らかである。處が、流布本系へ行くと「卷二」（伊藤入道が斬らるる事）の條に、其首を斬られる死方が如何にも怨みたつぷりである。

然ても不忠を振舞ひし伊東入道は生捕りにせられて、聖の三浦の介義澄に預けられたりしを、召出して鎧摺といふ所にて首を刎ねられけり。最期の時、西方にも問はず、十念にも及ばずして、父祖相傳の所領伊東河津の方を執心深げに見やりしぞ無慙なる（大山寺本）更に亦、禪師坊といふ兄弟の弟で早く越後の國上寺にやられてゐたが、兄弟の死後その片割れと見られ呼出されるが、之も吾妻鏡、大石寺本系が自殺するに對して、流布本系は最初は自殺を企てるが死に切れず苦しい儘に、鎌倉まで引出されて首を斬られる悲慘な話に變つてゐる。何故に流布本系は此樣に話を悲慘にしなければ氣がすまぬのであらうか。更に、之は全卷を通じて言へることであるが、大石寺本系では万劫御前、流布本系滿江の子供の問題である。

京の某人と京の小次郎、伊東祐泰との間に兄弟と御房、又曾我太郎との間に子供が出來る。少くとも三腹の子を生み、その子が又各

々不幸な死方をしてゐるのである。何故然るかが深い疑問でなければならぬ。

併し乍ら、少なくとも今迄擧げて來た大石寺本系より流布本系に移行してゐる間に生じた後味の惡い變化といふものは、女性の語り口による影響と思つてゐる。之を、今日よりみれば陰慘なる不幸感さえ抱かしめるのであつた。所謂、室町期を境に賤民の手中に傳承された文學には、實はこの陰慘な趣好はついて廻つてゐるのである。この理由はと言へば、女性が過去に犯した罪障を消滅させる目的を以て、自らの罪ある過去を告白して諸國を歩いた一つの傳承團體があつたが爲に、かくの如き要素が物語に加はつて來たと思はれるのである。從つて、その女性達は文學と別の目的を以て自らの極樂往生の効果を得る努力をしてゐたのである。それを一方に於いては、虎御前の色懺悔であり、別の系統と向はれる滿江一團の過去を說く罪多き生活であつたのだ。それを說く習慣が、悲壯なる可き仇討事件に、此樣な不道德なしかも陰慘なる要素を包含するに到つたかに見える。一方、彼等女性に言はしむれば、物語に拍車を加へる悲劇化に努力してゐたのであるが、目的が罪障消滅を第一にしたがために非文學要素の多きは、彼等に言はしむれば當然の事であつたのだ。從つて後味の惡い處が、曾我物語を廣く傳播させ、常民の多數に悲淚をぬぐはせた、女性は女性なりの趣好であつたのだ。

それが今日よりみると非文學的邪魔ものに見えるのは、時代の推移の結果であり、聽衆の趣好の低下にともなふ、語り手の零落であつたかと思ふ。（傳承團體に關する論は後述で論證する）

幸若舞と流布本

一

だが、女の語り手の懺悔のみで、此變化の理由のすべては說けぬ。幸若舞曲、古淨瑠璃、歌舞妓との關係の有無が考へられるからである。

大石寺本系より流布本系に到る間に非常に相違のある和田義盛と十郎の酒盃を擧げる條の事は既に詳細をつくした。此、江戸人の趣好に答へたかに見える流布本系の内容が幸若舞の「和田義盛」と同じ趣好なのである。唯、「辯才天の事」及「ふん女が事」の故事は小異されてゐるが、卷六の「和田義盛が酒宴の事」「朝比奈虎が局へ迎へに行きし事」「虎が杯十郎に差しぬる事」「五郎大磯へ行きし事」「朝比奈と五郎力競の事」以上五條目は舞曲和田義盛に一括して包含されてゐる。殊に問題になるのは、五郎と朝比奈の力競べである。

島津久基氏が既に、判官贔屓の幸若が義經記と別な發達をしてゐると考えられた。「幸若の曾我物」(國語と國文學 曾我傳說と國文學)

例へば、未來記・笛之卷・山中常盤等を擧げて證明される一方曾我贔屓は、別の發達變化に乏しいと言つて居られる。然し、大石寺本系と幸若の間は、少なくとも小さな變化ではない。朝比奈も五郎も幸若に來て、大變な力持ちになつて仕舞ふのである。流布本卷六「朝比奈と五郎力競の事」を引例すると、

斯くて朝比奈の三郎、舞も過ぎぎぬれば、五郎が立ちたる前の障子を引き開け見れば、案に違はず、時致は四天王を作り損じたる樣にて、踏みしかりてぞ立ちたりける。朝比奈過たず狂言に取りなして「客人ましますぞや、此方へ入らせ給へ」とて、草摺二三間むずと取りて引きけれども、少しも働かず。磐石なりとも義秀が手を掛けなば、動かぬこと有るべきと思ひて、力に任せ、えいや、えいやと引きけれども、五郎は物とも思はねば、引くとも無く引かるるとも無く、あざ笑ひてぞ立つたりける。大力に引かれて横縫草摺堪へずして一度に切れて後ろへどうど倒れけり。五郎は少しも働かで、二王立にぞ立つたりける。

幸若舞の方は、

舞もすぎ時分に見えし時、障子の内に金物の音からりと鳴つた。さればこそと思ひ、此處をちつと御覽あれやといふまゝに、間の障子をさつと明け、内を見入れて見てあれば、何か知らねども六尺ゆたかなる大男胸板見ければ、眞白なるが五尺餘りの大太刀を、七八寸寬げかゝらば切りよげに見えければ鬼の樣なる朝比奈も、唯膝振うてぞ立つたりける。「いかにや御身は五郎殿にてはましまさぬか、舍兄祐成も座敷にて候。」朝比奈心に思ふやう、實にやらん五郎は蛇に綱をつけたりとも、馬ならば乘らんと、廣言をすると聞いつるものを、座興ながら實に、力の程を試さばやと思ひ、「實に御邊は出づまじいか」といふ儘に、走り懸つて、腹卷の草摺二

三枚胴の板に引きしめ、前へえいやと引きけるに、ちつとも更にはたらかず。實にこれは强かりけるや、三浦一門は九十三騎、連判は四百八十餘人が中に、小林の朝比奈とて、名にし負うたる某が、五郎を唯今座敷へ引き出さぬものならば、しやうがいなりとおもひて、朝比奈三郎が、力の出で來るしるしに、左右の腕とかひなに、力筋といふものが、十四五二三十ふつ〳〵と出でにけり。胸をおふる力毛は、基盤の表に銅の針をすりならべたる如くなり。銅の筋が額へ上り、額の筋が胴へ下り、物によく〳〵譬ふれば、きうちやうの藤が、松をからんで、きりんがともをこうたるにちつとも違はざりけり。「おう仰々しの有樣や、宇佐見楠見河津、三箇の莊の內にして、荒馬に騎つての大力と呼ばれて、朝比奈程の小男に、闊々と引かれて座敷へは出づまじいもの、實に强う引くならば、三枚の草摺が切るゝか膝の筋が違ふか、ふまへた板が大地へ落ちつくか、三つに一つは定の物と思ひて、ふんちがつて立つた、はつしんをいらゝけ、前へえいと引いた。後へえいとのいた、草摺切れてのきけれど、立所を去らずして、ふんちがつて立つた、いや曾我五時時宗を、大力と申して怖ぢぬものこそなかりけれ。

金平淨瑠璃を待たずして、初代團十郎を待たずして、荒事は既に創められてゐる。と島津氏は言ふのである。この兩人の所謂草摺引は、歌舞妓に於いては貞享五年三月、江戸山村座興行「今古兄弟兵曾我」に於いて早くも見られる型である。

二

之が、歌舞妓の世界では初代團十郎の五郎、初代中村傳九郎の十郎役により演ぜられた。それが基本となつて荒事藝は發生して來るのである。

先の、島津氏の言を借りれば、藝能史上の順からみても、大石寺本系と流布本系の間に幸若舞を立て三段の變化と一應みられぬ事もない。だが、殊に日本文學の研究に注意せねばならぬ點は、合理論である。異本の考證の方法も荒事初代の臺本が無いため不可能に近い。幸若舞曲と流布本系との比較を密にする一方、方法を變へて、初代團十郎を中心に藝能史上の問題として、斷簡を集めて行く必要

を感じてゐる。物語と所謂曾我物とのぎり〳〵の交流點はいまだに解決がついてゐない儘に殘されてゐるのである。

だが、流布本系が幸若と近似した趣好をもつてゐるといふ事が、語り手の趣好の近似を意味してゐた。してみると、少くとも以上あげた部分に限り、流布本系は幸若の語り手に近い趣好の人々に語られてゐたと思はれる。

一方には、前に述べた陰慘なる要素があり、一方には亦、かくの如き荒くして明るい要素を持ち、所謂流布本は滿腹したのである。伊勢貞丈が卷一「惟喬惟仁位爭」の條に「我が山の住侶に惠良和尙云々」とあることより比叡山の僧に作者を凝し、之が有力な作者考の一つになつてゐるが、江波淵氏が（曾我物語に就いて――國語と國文學大正十五年十月）箱根僧だと反證を擧げた。この二つの有力なる對立は、箱根中心の唱導團體が、いつからか叡山中心の藝能團にも波及したことを考える人々にとつては、この對立意見は大部ゆるめられる。まして、幸若舞曲の始祖桃井幸若丸が叡山の出身である處より見ると、大石本系より流布本系への增加が幸若に近い要素が多い事は、深い暗示を含んでゐるかに見える。

三

此、幸若舞に近づいた傾向は未だ二箇所見出す事が出來る。一つは「卷七」にある。幸若で言へば「小袖曾我」の部分である。此內容は但し大石寺本系にも見出す事が出來るが、流布本系に行くと、之が又相當な變化をしてゐるのである。大石寺本は「卷六」の終り、流布本は「小袖乞の事」の條である。分量から言ふと、流布本はまさに三倍餘に亙る增加であるが、その內一番注目すべき處は、五郎が母の勘當を許されてより以後である。「それそれ酒飲ませよ」と母の命で酒盃がはじまるのであるが、一わたり盃がまわると母が「當時鎌倉にては、秩父の六郎が今樣、梶原源太が橫笛と聞く。然れども他人なれば見もし聞きもせられければこそ。吾殿は箱根に在りし時、舞の上手と聞きしなり。忘れずは舞ひ候へかし」十郎腰より橫笛取り出だし、平調に音取り、「如何に如何に遲し」と促し

ければ、暫し辭退に及びけるを、十郎囃し立てて待ちければ、五郎扇披き、期うこそ謠ひて舞うたりけれ。」と以下歌の詞章が續く。處が、之が幸舞の「小袖曾我」にあるのである。

五郎は父におとらぬまひの上手と聞一拍子うたへさかなにせんと仰ければ時致承て母上の御前にて舞まふへき事共もこれをさいごと思ひければいつ〳〵よりのまひよりも心ぼそくぞまふたりけるしづやしづしづのをだまきくりかへし昔を今になす由もがな昔を今になさばやとやゝしばらくうたひしがおつる涙にめがくれてまひをばちうでまひとむる

之になると流布本の方が正確な舞ぶりを傳へてゐる。之を大石寺本系よりみるならば、酒宴と舞が加はつて來た事になるが、判つきりと舞曲に接近してゐる。亦、幸若舞曲の中に判官物と曾我物はその大部分の部曲を占有してゐるが、私だけは偶然の現象でないと信じてゐるのである。ましてや、幸若より女幸若の舞太夫が分派し、之が江戸女歌舞妓の祖となつて行く藝能史上に、接近のない筈はなかつたに違ひない。（藝能史上の曾我は別論）

四

大體以上で、大石寺本系にない流布本系のミダシの大部を點驗した。だが、まだ一つ殘つてゐる。それが「卷三」の大部分、幸若で言へば「きりかね曾我」である。

工藤祐經の請願で、遂に幼少の兄弟が賴朝の知る處となり梶原源太が使で曾我に連れ出しに出掛け由井濱へ引出すが、梶原源太はじめ諸將の願望に依つて、遂に畠山重忠が命を乞ひ請けて無事に曾我へかへる話である。横山重氏の「古淨瑠璃正本集二」にも「きりかね」として出てゐるが、劇的で非常に面白い處である。之は單に曾我兄弟の生涯に苦勞と危難を加へ、物語に波亂を呼ばむがための創意といふ可きものが、かくの如き脚色を加へたのであらうか。一應はさう考へて置かねばならぬ程よく劇化されてゐるが、之にも何か前代のモデル、又は類似の物語があつたのかも知れぬ。

室町文學を回顧すると、熊野之本地（室町時代物語集一より四まで）はじめ多くの本地物、早い話が、山椒太夫がやはり流離苦難の然も若い貴神の成長する話で、此類型は非常に數多い。（折口信夫先生、日本文學の發生序説）この影響からかと想定される事が一つ。も一つは柳田國男先生の「巫女考八」箱王と笈の塚（鄕土研究一卷八號）にある箱王に對する考へ方である。引例すると、

美作苫田郡上田邑の箱王谷では、俚民箱王の像を刻ませて之を祀つて居た。作陽志には箱王は如何なる人か知らず。此邊に金丸烏帽子町などの地名があつて何か由來があるらしいとある。此も多分は大磯虎の故事にこじつけられて居るだらう。曾我物語に五郎時致の童名を箱王とあるが、其動機は何であつたか。箱根に成長したから箱王だと言つてもよいが、それも亦小説であつたなら、どうして其趣向が浮んだかを尋ねたい。白王權現と云ふ祠は土佐に甚だ多い。此神の王の字は王子の王で、古人の幼名に何王何若の多いのが、何れも元は神のミコに擬して其保護を仰いだのと同じく、神託を仲介すべき人の稱號から移つた名であらうと思ふ。更に奥深く傳説の林に分入つて見ると、そこには猶多くの語草が茂つて居る。例へば稚子淵の昔話は轉じて眞言僧との物悲しい情史を作り、或は戰國時代の悲劇に取合せて、乳母と若君との落人の物語を傳へ云々……

と言はれてゐるが、之で判る如く五郎の幼少の筥王も又幼い神としてミコに託された時代があつたことが想像出來るので、此曾我兄弟が由井濱へ引出される命乞ひの一條も、何か偶然でない傳唱者の力と思つてゐる。

五

先に、化粧坂の遊女をめぐつて、五郎と梶原源太と喧嘩をすることを言つたが、此梶原源太が若い頃の兄弟に命乞ひをしてゐるのである。それ以後大部年へだたつた。源太も良い年になつてゐる筈であるが、五郎對手に若々しくも戀を爭ふてゐる。しかも、此兩方の記錄共に大石寺本系に無い內容であるから、全々新しい增加で、不自然な性格內容を露見させてしまつた。

命乞ひが「卷三」であり、「卷五」で喧嘩をするのであるから、此「卷三」と「卷五」の間にはどうしても二人の作者を考へねば理は

通らぬのである。江波氏の言ふ謠曲「望月」及六十一番職人歌合せに見出した語り手の瞽女の例證は、此處に亦、二種類の瞽女を考へねばならなくなつて來た。之に依つて考え得る事は、幸若舞曲や古淨瑠璃の如く、幾日分かに別れて一つ一つ語つたらしい跡が窺えるのである。之と同じ樣に、少なくとも流布本系に到るまでの語りつぎは、やはり全部を一度に語つたのではなしに、一部分づゝ、然かも多くの瞽女により、やつばちに合せて語つたであらうと考へるのである。流布本系に內容が增加してゐる事は、古い口頭傳承の名殘であつたが、それが部分部分を語り繼いで行つた事が、實は梶原源太の如き二重人格者を創り上げてしまつたのであらう。「十卷本」「十二卷本」の相違には深い意義を感ぜぬが、ミダシが小割に生じ、然る程に、そもそもの語り口で增加して行く點は、建久何年何月云々で語りはじめる大石寺系と較べた場合、はつきり語り手の勢力は增加してゐたのであつた。

虎御前の廻國

一

大石寺本系と流布本系の筋立の相違は、一應以上で終つてゐる。併し、細部に亙つて行くと未だ考へさせられる節々を持つてゐる。吾妻鏡に、虎御前が和字の諷誦文を捧げ、葦毛の馬一匹を引き唱導の施物を爲しつゝ、善光寺へ赴いた記錄は、吾妻鏡が眞字本の影響を受けたのかも知れぬ。（別に論ずる）善光寺が尼の一中心を爲して居たことは、此時代の記錄に容易に見出すことが出來るので不思議は無い。唯、大石寺本系が善光寺のみにとどまらず、熊野迄出かけてゐるのである。卽、大石寺本「卷十」の終末に

其後虎は曾我の女房に暇を乞ひ、二人の骨を頸にかけ、信濃國善光寺へ參りつゝ、曼荼羅堂に殿原の白骨を藏め、堂塔巡禮し、故鄕へ歸るとて、……

之は吾妻鏡に共通してゐる。此少し前、箱根で兄弟の母と追善を濟せて唯一人になつた虎が、

斯くて駿河國を立出でて、都の方へ上り、熊野參詣を遂げて、太子、當麻、笠置、岩屋、吉野、粉川の方を打廻り暫く天王寺に逗留して七日の參籠を遂ぐる

そこへ一人の比丘尼がやつて來る。それが工藤祐經が殺される時卷添ひを喰つて殺された備前貴備津宮の往藤内の妻であつた。そこで袖を絞つたが、それからは二人で駿河國に聞えた四個の大寺、建保・久能・平澤・大窪を拜み廻る。以後は又虎一人で伊藤の釋迦堂へそれから箱根、先に擧げた善光寺へと往く。その歸路松井田の宿で京の小次郎の妾にあひ涙を絞る。更に又歩いて、板鼻、伊香保、第三年目にやつと曾我へついた。さて、曾我の女房も出家、夫の曾我太郎も出家し、果ては兄弟の家來鬼王・道三郎も出家する。出家するのは此兄弟の關係者ばかりではない。此虎の出家の名禪修比丘尼を慕つて數知れざる人が出家して往く。大石寺本に

其外昔昵びし遊君共も、心ある女は、尼公に對して出家を乞ひ、酒肉五辛をば道場へ入れず、不犯淸淨の身となり、毎日極樂依正の注文を談じ、六時不斷の念佛、禪修尼を長老として、十二人の尼、朝暮勸行怠らず、歸依の旦那も多かりけり。三浦、鎌倉より施入の旦越、數多集まりしとかや。況や曾我の一門は申すに及ばず、本間・澁美・澁谷・海老名・二宮・松田・河村・土屋・岡崎・早河の人々も假初の佛事にも、曾我の大御堂にぞ集りける。禪修尼平生に、今生の快樂にて、極樂不退の因緣、殊に女性の爲に便あるべしと、念佛の功德廣大なる事を談じ……

二

此處に注目せねばならぬのは、往藤内の妻も虎も出家の名を比丘尼と言ふことである。之だけの廣大な土地を歩いて、然かも之だけの出家する人を加へたと言ふことは、虎と言ふ比丘尼が、熊野の信仰を說いて歩いた勸進比丘尼と同じ性質を持つてゐたのである。

此、熊野より出る繪說きの比丘尼が始めはグロテスクな地獄繪圖を持つて、生前佛に供へぬものは此樣な地獄に落ちると說いた。それが後に次第に今日見る繪卷物風の物語を說く樣になり、自分自身の過去の惡業不德を說いて、人々に厚い信仰心を持たせたのであ

る。虎といふ比丘尼も又、和字諷誦文にとどまらず、自分の過去の罪障消滅のため懺悔して歩く八百比丘尼（折口信夫先生、古代研究）の如く、曾我兄弟と自分の關係を説いて歩いたと思はれる。之を、比丘尼の本旨よりみれば、極く自然の事であつた。

從つて、流布本系に虎御前が活躍を強め、曾我物語に虎、十郎を中心とした陰慘な話を加へて行くのも、言つてみれば滿江と共に虎が極樂往生を遂げるために必要なる懺悔告白が、かく文學を陰慘にしたと思はれるのである。室町時代中心の物語にはこの懺悔要素はついて廻つてゐる。繼子繼母の類話にしても、讀むに耐えぬ程いぢめちらす。歌舞妓の世界にもこの要素は充分後世迄絲を引いてゐる。之を以て日本民族の殘虐性を論ずるのは當を得て居ない。懺悔の目的を失つた後でも、文學にいつまでも、その要素が殘つた迄である。唯、歌舞妓の世界では、後世惡業を肯定する地盤の上に之を認める作者が出ては來るのだが、根本の出處は此處にあつたのである。

三

流布本は、箱根に於いて追善する處までは同じである。だがその後、虎は一人になつて先づ兄弟の討死した井出ノ里を訪ね、兄弟の靈を弔ふのである。此以後の廻國の樣子は大石寺本と大部變つてゐる。それ以後虎は工藤祐經が討たれた時に侍つてゐた手越の少將にあひ、この少將も出家する。

吾妻鏡に於ける虎の記事は判つきりと「除髮せずといへども」と出てゐる。それにも拘らず、此本の虎も手越の少將も「翡翠の髮を剃り落し」とある。大石寺本は判つきりせず、唯改名して禪修比丘尼と言ふとだけ記錄されてゐた。同じく流布本に、

然る程に、二人は打連れだち、麻の衣、紙の衾を肩に懸けて、諸國を修業し、信濃國善光寺に、一兩年のほど他念を交へずして念佛申し、過去、聖靈、頓生菩提と祈り、また都に上り、法然上人に逢ひ奉り、念佛の法談を委しく聽聞し、彌增に念佛修行進みけるこそ有難けれ

此處に到つて流布本は大石寺本と廻國の足並が合はなくなつた。何故に法然に合ふ話に變更されるのであらうか。それよりも大石寺本の虎と流布本の虎と同人かどうかと疑問が生じて來る。それは後の論にゆづり、それより虎は大磯に歸り、兄弟の母と二の宮に會ひ、法然の天台淨土の佛得を說得せしめるのである。

簡單に言へば、流布本は叡山淨土宗の靈驗說話になつてゐる。この叡山の記事が流布本にあつて、大石寺本に無いといふことが、流布本を特色づけてゐる一つである。殊に「卷六」に於いては「比叡山の始まりの事」の條には叡山の靈德を露骨に說いてゐる。流布本に故事の加はつてゐることはうるさい位であるが「惟喬、惟仁の位爭の事」も叡山中心の事であるばかりでなく、大山寺本を校註された荒木良雄氏は、流布本は增補された型と言はれてゐる。

「比叡山始の事」が太平記乃至謠曲「白髭」に見えてゐる傳說と同系統ながら、叡山の緣起を說き、「帝釋と阿修羅の戰の事」に天台の釋を引き。「嵯峨の釋迦作り奉りし事」に今の嵯峨の釋迦を語つてゐるのは、この增補者が京都在住の人であり、淨土僧であるらしい推定を確かにする。或は「三井寺の智興大師の事」「泥不動の事」を增益したのも、その關係であらうかと思はれる。

と說いた。良い說である。そして擧げられた之等のミダシはすべて大石寺本系に無い。そして一方に、此事を論證するが如く、大石寺本に熊野を廻つて來た虎が、流布本では親鸞上人の處へ法を聽きに行つてゐるのであつた。

之を、唱導者の側より考へれば、語り手の虎は二人以上とみねばなるまい。と同時に、叡山を中心とした唱導者が語り繼いだであらう事も動かし難い。

熊野比丘尼系統の比丘尼は、かならずしも髮を剃ることを要しなかつた事は、既に柳田先生が說いてゐる（鄕土研究、毛坊主考、巫女考）吾妻鏡の記錄が之に合致する事が一つの暗示である。處が天台の僧は剃髮するのである。一方、江波氏の說いた七十一番職人歌合せに出て來る瞽女の繪は盲で髮の毛が無いのである。少くともこの二系統は考へて置く可きかと思ふ。まして、平家物語、幸若舞曲すべてこの山になつたとする古人の說は、深い意味を持つてゐたのである。曾我物語を伊勢貞丈が「わが山」說を以て叡山僧によつて書かれたとする考へは、根據のある說であつた。だが、之が大石寺本系に、全々見る事が出來ないものであるが故に、箱根山僧說が有

力化して來るのである。併し、流布本系と大石寺本系に根底をゆるがす程大きな筋立ての變化がある譯ではない。筋は飽迄も大石寺系より糸を引いてゐるのである。

この樣に流布本系は和田義盛を中心とした幸若の洗禮を受け、一方にはかくの如き叡山僧の影響下に膨張したのである。言つてみれば、足柄山脈を中心とした物語より離れて、やがて都に迄普及された面影なのかと思ふ。

曾我兄弟の墓

一

曾我物語の內部に於いてすら、先づ二人の虎御前が考へられた。處が、何が故にか江戸の隨筆、圖繪の類、又全國に今の世に殘つた口碑に、虎御前が歩いて來たとか、此土で死んだと信ぜられてゐる處が非常に多いのである。之にともなつて、兄弟の死んだ土地といふのも、之亦無數なのである。私の處にはその資料は乏しい。唯、大正四年に日本及日本人といふ雜誌に柳田先生が「曾我兄弟の墳墓」といふ論究を書かれた。之が貴重なこの論旨の基礎資料になるのである。

(1) 先づお膝下から言へば、東京下谷新寺町法福寺內に虎女の墳なりといふ五輪塔がある。此塔は中古迄は或大名の屋敷にあつたのを不思議の事ありて此寺へ移せりと傳へられてゐる。不思議の事ありて石を移すとは虎女の話に多い。虎女は何時も石が伴をしてゐる。

(2) 甲州中巨摩郡蘆安村字安通組の伊豆神社には本社の相殿に曾我祐成と其妾虎御前とを祀つて居る。土地では虎女は此村の生れであるが人並勝れし美貌なりしかば大磯の長女の御內に迎へられて養女となりしに、祐成の歿せし後は、故鄕に歸りて祐成の冥福を祀つたのだと傳へられて居る。祠の西には虎女の鏡石といふのもある。（附記　昭和二十九年七月此處を訪ねた。安通組ははやり病の爲人

家亡び、伊豆神社も村内に移したといふ。村の老人の話に、まだこの伊豆神社が安通組にあつた頃、村の老人が五月二十八日の涙雨の祭日の晩この前を通りかかると、社殿の奥で刀を斬り合はせる音がした。びつくりして村に入り、御燈明を上げて祭つた處、刀の音は止んだ。この祭日はかならず雨が降つたものだと聞かせて呉れた。從つて今はこの鏡石だけが草むらにかくれてゐる)

(3) ずつと西へ飛んで但馬國朝來郡森村にも虎御前の墓がある「大磯の虎此村に來り南某の家に泊せしに會々脚疾を患ひて歿せしかば村人厚く之を葬る」云々と「朝來誌」に記して居る。

(4) のみならず隣村大月村にも九重の石塔ありて、村人は之を虎御前の墓だと言つて居る。二ヶ村に竝んで二つ墓のあるのなどは餘り振ひ過ぎてゐて御挨拶に困るが、それでも「古代のものなるに似たり」と朝來誌は保證して居るから面白い。

(5) 次に西へまはつて安藝國へ行くと、此國では到處に虎女の舊跡墳墓がある。第一は高田郡北村のもので、此處には虎が流寓の處といふのがある。さうして此處の緣起によると、虎女は今日の廣島縣下全體を踏破してゐる。

(6) 即ち初め豐田郡戸野村に居り後備後世羅郡赤屋村に移り、正治二年此村に來り承元三年に三十六歳を一期として此處に歿すと記されてゐる。歿年及年齡迄が確かに記してある。だから虎の墓のあるのは勿論、持つて來たといふ佛像も安置してある。

(7) 然るにをかしきは戸野村にも墓があり、其處の字を大磯とさへ名づけて居る。

(8) 又世羅村の方には虎少將二人の墓があるのみか、同伴して來たといふ鬼王段三郎の塚が三谿郡三良村にあるし、

(9) 又た赤屋村の反載寺には兩尼の携へ來りしといふ笈と觀音像とがあり。

(10) 尙ほ世羅村字小童村には祐成の假墓と虎の墓と雙つ竝んで居つて、墓番には毎年掃除料として米若干を給與し、虎の命日を三月十五日として毎年佛餉米五升を供して村内の正願寺で懇ろな佛事を營んで居る。斯く廣島縣には虎の舊跡が多い。

(11) 少し山陽道を山奥へ這入つて美作國苫田の上田村引乘寺の本堂たる阿彌陀堂の南に虎の塚がある。土人は皆虎御前の墓だと信じて居るが、實は寺の大檀那の山名家の息女を葬つたのだといふ說もある。

(12) 瀨戸を飛び九州に渡ると、日向の南端なる志布村大慈寺の境内にも虎の古跡がある。

以上十二を數え、併し誰れか別に虎に誤られさうな比丘尼があつて、當時に全國行脚をした事は或は有つた事かと想像されぬでもないと言はれてゐる。

大石寺本に虎が熊野へ出かける。その紀州の突出した半島から、三つ資料が出た。一つは和歌山縣那賀郡池田村の傳へである。

池田村大字池田新五番地　三熊山陽瀧院權現寺境内にある。簡略に言ふと、寛永三年正月七十一歳を以て紀州熊野で虎は歿したと云はれる。寺記によると、虎御前は曾我兄弟の死後、其の遺骨並に遺物を携へて熊野に詣で之を奉納せん爲大磯を出發し、二十餘日を費して紀伊路に入つた時、俄かに病に罹り歩行困難となつた。偶々此の地に權現を祀る社のある事を聞いてかろうじて當寺に詣で、合掌して程なく息絶えた。里人及び寺僧之を葬つて碑を建てた。文明元年寺僧願海が曾我の遺骨を高野山に納めたとの事である。寺の東方丘上に虎御前の墓があつたが、今殘存してゐるのは笠石のみである　（紀北傳說集）

大石寺本系は熊野より大磯迄歸つて來てゐるのに熊野への途中で死んだといふ此人も又別人であらうが、更には「紀伊國名所圖繪」に次の記事があつた。

○大磯虎車塚　（卷之一）

北大井村にあり。今こぼちて塚の形なし。小き石佛を安ず。曾我兄弟父の敵工藤祐經を討取りし後、時宗の妾大磯の虎尼となり、熊野に詣づる道に峰村といふ處に來り、俄に病みて死す。土人哀なる事に思ひ、其骸を乘り來りし車と共に葬りて塚とし、車塚と名くとかや。

更に、前に擧げた池田村の例は圖繪にも更に詳しく出てゐるが、同じく南陽山十輪院傳法寺といふ處では、虎の遺物、什物、打鉦、古鏡一面、虎塚より出で記念にしてゐることが誌されてゐる。處が、非常に善く似た傳へで、やはり紀州車塚のミダシで「新著聞集」の第六勝跡篇に、

紀州わか山より熊野道岩手村の神宮寺は、往昔大磯の虎尼に成て熊野詣でせしに、車を曳岩手村にいたり、限りに煩ひしを、邊ちかき發心者、此有樣をみて、今は權現への志も叶はじ。いと哀の事とて、熊野三山の體相を畫て、拜せたりしに、有がたき結緣に逢奉

りけるよとて、手を合せ打涙ぐみ、經を誦し念佛して、程なく空しくなりし。そのなきがらも車と共々其ところに塚につめ込しより車塚といひし。里人もろともに哀におもひしより、三熊野を此處にうつし奉り件の發心者の庵を、神宮寺虎にかけぬ。かの車には妻の十郎の形見の太刀、その外の物など侍りしを、寶物にして、今にありしとなん。

二

集めた資料は皆熊野と一聯の關係を有してゐる。之が大石寺本と共通する。何故に熊野へ骨を埋めに行くのであらうか。小栗判官（古代研究）にしてからが、半死の體を熊野迄車に乘つて行つて再生する話である。下つてはいざり車の非人仇討は江戸時代に榮えるものの、すべて熊野中心の懺悔ものの流れを傳へてゐる。此記錄のかげに潜むものは、虎御前と、熊野派の比丘尼と交流混同してゐることを示してゐる。虎石の傳說を加へると、更に虎傳說は莫大なものになる。別に之を柳田先生は古代よりある石占の團體と考へられて居られる。（「老女化石譚」「女性と民間傳承」他）

此團體との交流があつたからこそ、農村の田植（俚謠集——後に論ず）にまで唄はれ、曾我物語を廣く國々に印象づけて行つたと思はれるのである。從つて、以上列擧した墳墓はその人々の久しい足跡であつたのだ。山東京傳が「近世奇跡考」の中に

歌比丘尼、むかしは脇挾し文匣に卷物入て、地獄の繪說し、血の池のけがれをいませ、不產女の哀を泣する業をし、年籠の戻りに、烏午王配りて、熊野の權現の事觸めきたりしが云々

とあるのは、地獄めぐりで名高い熊野三山を想像せしむるに充分である。處が、此繪說の痕跡かと思はれる個處が、流布本に見られるのである。「卷七」鞠兒川の事の條に、先づ五郎を次の如く言ふ。

「箱根を忍び出で候ひし時は、權現にも御暇をも申さず、まして師匠に斯くとも申さざりし事、今に其恐れ殘りて覺え候」と申しければ、十郎も然てこそとて、箱根にぞ掛かりける。鞠子川を渡りけるが、手綱かいくり申しけるは、「吾殿三つ、祐成五つの年より

廿餘の今まで、此の川を一月に四五度づつも渡りつらん。如何なる日なれば、今渡り果てん事の悲しさよ。何やらん何時よりも此川の小濁りて候、心もとなしと言ひければ、五郎申すやう、「皆人の冥途に赴く時は物の色變り候とな。我等が行くべき道、曾我を出づるは娑婆を別るるにて候。此川は三途の川、湯坂の峠は死出の山、鎌倉殿は閻魔王、御前祗候の侍共は獄卒阿防羅刹、左衞門尉は善知識箱根の別當は六道能化の地藏菩薩と念じ奉る。此川の水色變ると見えて候へ」とて……

何も笑はせんがために賴朝を閻魔王にしたのではない。之でも眞面目に地獄を說いた然かも繪說きの面影が見える。之が又箱根が熊野にみたてられた片影でもあつたのだ。

三

箱根と熊野の信仰史上の交渉は斷案がない。その爲、此處には、その基本的な資料を見て行く他はない。柳田先生の巫女考の四に、古い處では宗像の神、それから例の八幡神熊野白山藏王諏訪駒形の如き、中古以來其數延喜式內の社に數十倍した大小の祠があるのは、疑ひもなく巫道流行の勢に由つて次から次へ其信仰を擴張したものである。近世の里の神に神名帳に名るやうな地方的特色が無くなり、或は九州に處々の白山諏訪社があり、奧羽に熊野堂が多くなつたのは、勿論一つには武家新恩の領地の交錯にも基くであらうが、更に、又古來漂泊を生涯とする巫女の徒があつて、年來旅に倦む頃には便宜を求めて笈の神と共に土着した結果である。之が考への絲口である。先づ、箱根と熊野の山の關係の有無を「足柄下郡史」(折口先生編)にさぐつてみよう。

今の箱根神社の神は天津瓊々杵尊、天津彥火出見尊、木之華咲耶媛尊となつてゐるが、鎌倉時代に箱根の他に伊豆山を考へ、二所權現と云つてゐるが、箱根緣起には此箱根神社の勸請者と內にある坊金剛王院を別にしてゐる。社の方は僧滿願、坊の方は聖占仙人、二世が利行丈人、三世を玄利老人として祖像を置くと言ひ、聖占を駒形權現、利行は能善權現、高根權現は玄利に當て、この駒形が大磯の高麗權現を勸請したものである。又能善は熊野權現を勸請した事を書いてゐる。更に本社の方、金剛院第四世滿願の夢想に現れたと

いふ三尊のうち、本尊らしきものは比丘の容姿をなし、左に如意寶珠、右に獨鈷を携へ、第二尊は宰官姿態で、手に白拂子を持ち、尙一尊は女神であつた。一社の靈廟に三尊を合祀し各箱根三社權現と言ふ。と書かれてゐる。之が熊野勸請の根底である。

も一つ考へられる事は、熊野の三所權現の內新勃興の那智を伊豆山權現、新宮を箱根に當てはめてみると、新宮より那智を望むのと箱根より伊豆山を望む景の似てゐることである。そして箱根はこの三所と二所が何時も動搖して固定しないのは熊野に左右されていたのかも知れぬ。更に言ふと、兩方共涌湯があり、熊野の地獄山の印象は、箱根の古記錄に死出の山（箱根權現由緒書ノ內箱根山由來）懺悔之地なる故懺悔津（箱根別當快雅口上覺書）等と出てゐるのでこの地獄谷が當てはまるのであらう。以上の資料より熊野を箱根が勸請した事を頭に描いてみたのである。さうなれば、先程述べた、虎車塚の口碑等もしつかりした妥當性を持つて來る譯である。柳田先生の熊野勸請の論究は、巫女考の十に、

一定の神社に從屬せざる所謂縣巫の仲間に於いても、やはり女系血脈の思想が行はれて居たことは、略證明することが出來る。關東の梓巫女は所謂神事舞太夫と共に、以前は悉く江戸淺草三社權現の田村八太夫が配下であつた。（中略）太夫等の奉仕する三社權現の如きも淺草では檜熊濱成川成三人の兄弟と云ふが、高崎では荒神駒形及び大黑の三社と云つて居た。而も實は熊野の三社であつたらしいのである。

と言はれてゐるのをみると、關東への傳承が思はれるので、更に又、次に擧げる先生の考へが流布本で今あげた地獄の文章の理由を根據づけてゐるかと思ふ。

足利時代に出來たと云ふ職人盡歌合には熊野比丘尼は俗體で烏帽子小素襖を着し琵琶を抱き、杖の先に雉の尾をつけたのを持ち繪卷を前にひろげて居る。其歌は、

繪を語り琵琶彈きて經る我世こそうき目見えたるめくらなりけれ

とある。熊野比丘尼が熊野の繪と稱する地獄六道の畫を雉の尾羽で繪解を爲し勸進してあるいたことは、骨董集其他の有りふれた書に見えて居るから之を省略する。繪解の役に盲は似合はぬやうだが以前はあつたと考へる。

結論を言へば、曾我物語を傳承した者は、虎御前と言ふ宗教團であり、一方この宗教團は熊野の比丘尼と交流する時代があつたと思はれるのである。更には、淨土宗叡山の說教の團體が加はり、故事來歷と懺悔の要素を加へ、寄合世帶の流布本が形成されたと見てゐるのである。（眞字本論究は別の論とする）

平家物語と源平盛衰記の交渉

一

「義經記」が男によつて語られ「曾我物語」が瞽女の語りものであるのに對して、琵琶に合せて、やはり叡山の說教團の盲法師の手によつて語られたと思はれる「平家物語」とこの異本「源平盛衰記」との間に然らば、當然語り口の變化がある可きだと想像されるが、此處にも亦、語り物の宿命とでも言ふべき變化を見出すのである。それが千壽(手)と言ふ白拍子の描き方に見られるのである。

千壽ノ前といふ白拍子を知らぬ方も、鎌倉に捕はれの身となつた平重衡に思ひ當るであらう。此重衡に對する賴朝は、人間の落目につけ込む小人ではなかつた。叮重な禮を以て迎へてゐる。この悲運兒のなぐさみにもと、千手の舞を侍らせるのである。之が吾妻鏡の「卷三」元暦元年四月の條に、

廿日、戊子、雨降る、終日休止せず、東三位中將(重衡)、武衞の御兎に依りて、汁洛の儀有り、其後秉燭の期に及びて、徒然を慰めんが爲と稱し、藤判官代邦通、工藤一萬祐經、幷びに官女一人(千手と號す)等を羽林(重衡)の方に遣はさる、剩へ竹葉上林巳下を副へ送らる、羽林殊に喜悅し、遊興剋を移す、祐經凱を打ち、今樣を歌ふ、女房琵琶を彈じ、羽林横笛を和す……武衞又宿衣一領を千手前に持たしめて、更ねて送り遣はされ、其上に祐經を以てす、邊鄙の士女還つて其興有る可きか、御在國の程召置かる可きの由仰せらると云々、祐經頻りに羽林を憐む、是往年小林內府に候する時、常に此羽林を見るの間、今に舊好を忘れざるか

又、「卷八」の文治四年四月にその死を傳へてゐる。

廿五日、辛卯、今曉千手前卒去す、（年廿四）其性大に穩便にして、人々の惜しむ所なり其故三位中將重衡參向の時、不慮に相馴れ彼の上洛の後、戀慕の思朝夕休まず、憶念の積む所、若し發病の因と爲るかの由、人之を疑ふと云々、

處が、平家物語「卷十」千手前の條をみると、氏素性が違つてゐる。

「さても唯今の女房は優なりつる者哉。名をば何といふやらん」と問はれければ、「あれは手越の長者が娘で候を、眉目形、心樣優にわりなき者で候

更に又、その吾妻鏡にみる悲しい最期とは別の、言つてみれば虎御前の如く、重衡の菩提を弔つてゐる。

「琵琶の撥音朗詠のやう、後までも有難き事ぞ」と宣ひける。千手の前は中々に物思ひの種にや成にけん。されば中將南都へ渡されて斬られ給ひぬ、と聞えしかば、やがて樣をかへ、濃墨染にやつれ果て、信濃の國善光寺に行すまして彼後世菩提を弔ひ往生の素懷を遂ぐるとぞ聞えし。

二

三轉して「源平盛衰記」をみると、その素姓が又變つてゐるのに驚く。卷三十九である

夜部の女は如何なる者ぞと尋ね給ひければ、白川宿長者の娘千手前とて今年廿に罷成る當時は鎌倉殿のきり人にて御氣色よき女房なりとぞ申しける

併し、源平盛衰記は話の內容が變つて來る。つまり賴朝が千手に重衡が情の有否を問ふと否と答へる。そこで鎌倉ははした女ばかりと思はれるのは殘念といふので、賴朝が伊王といふ、平六兵衞の娘をやる。然し之も否である。そこで卯月の一日から明る年の六月上旬まで、千手が榊葉と云ふ美女を、伊王は結四手と云ふ美女を共につかはすが否である。その內に重衡は南都で斬られて仕舞ふ。すると

二人は髪落して一所に庵室を結び九品に往生を祈るのであるが、後千手は伊豆山に入ることが描いてある。

此三著の千手を考える時、各々別の語り手に語られた事はよく判ると思ふ。平家物語と異本源平盛衰記との間には語り手の相違といふものが、かくの如く作用した歴史がありありと痕跡をとどめてゐたのである。

三

古淨瑠璃にすら、七日目の最期の日には、「ぜんじそが」を語つて、兄弟の菩提を弔ふ條に一日費して語つたらしい。昔人は呑氣であつたらうが、之は之で相應の理由はあつたのである。

處が、大山寺本曾我物語は惜しげもなく、箱根で追善する事のみ言つて、大石寺本「卷十」流布本「卷十一」「卷十二」の部分を捨ててしまつてゐる。その上に、流布本が大山寺本より多いミダシは悉く、叡山來由にからむ故事、支那の歴史解説文なのであつた。之を唱導文學の上よりみるならば、この唱導部分を捨てにかかつた大山寺本はその意義を失ひかけてゐると見たい。

播磨の大山寺に、伊勢物語其他の文學書、學問書と同じく保存されてゐる事は、既に唱導性を忘れむとしてゐたのである。之を、文學上よりみれば、所謂非文學要素から脱して、いはば文學の醇化作用が起りつつあつたと見たいのである、

曾我勲功記その他の異本等になると、全くその仇討を讃美した悲壯なる物語にダイジェスト化されてゐる。從つて、曾我物語が仇討中心に考えられる樣になると、唱導者虎は戀人としての要素のみ强調せられて行く。裏打になるものは時代の進化であり、之にともなふ國民趣向の進展であつた。

だが、曾我物語をかくも國民の心理深く植つけた處のものは、國民の讃美からではない。今は地底にほうむり去られて、かえりみられる事のない無名の比丘尼等の目的を違がへた唱導性が土臺になつて、はなやかなる讃美の物語は芽をふいて來たのである。物語の悲劇化は理由なしとしない。

附記　諸國にある鬼王道三郎の石塔、滿江・箱王・等唱導團體はまだ〳〵考へられる。此論は言はば之等のバックボーンに過ぎない。